

B年降臨節第1主日 マルコ13章 33―37節

〔直訳〕

33 気をつけなさい **目覚めていなさい**、

なぜならあなたがたは知らない

いつ **その時**が 来るか。

34 ように ある人が 旅に出て

後にして 彼の家を

そして与えて 彼の僕たちに 権威を、

各人に その仕事を、

そして 門番に 命じた、

彼が **目を覚まして**いるようにと。

35 だから **目を覚ましていなさい**、

なぜならあなたがたは知らない

いつ 家の主人が 帰るか、

夕方か、 夜中か、 鶏の鳴く頃か、 早朝か、

36 突然帰って 彼が見つけられないように

あなたがたが眠っているのを。

37 だがあなたがたに 私が言うことを、

すべての人に 私は言う、

目を覚ましていなさい。

〔新共同訳〕

33 気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつなのか、あなたがたには分からないからである。34 それは、ちょうど、家を後に旅に出る人が、僕たちに仕事を割り当てて責任を持たせ、門番には目を覚ましているようにと、言いつけておくようなものだ。35 だから、目を覚ましていなさい。いつ家の主人が帰って来るのか、夕方か、夜中か、鶏の鳴くころか、明け方か、あなたがたには分からないからである。36 主人が突然帰って来て、あなたがたが眠っているのを見つめるかもしれない。37 あなたがたに言うことは、すべての人に言うのだ。目を覚ましていなさい。

①マルコ13章全体の文脈

①a マルコ13章は、神殿の崩壊がいつ、どんな徴のもとに起こるのかと弟子たちが尋ねたときに、イエスが答えた、終わりの日(終末)についてのまとまった教えであり、黙示思想の影響を色濃く受けている。マルコ13章は「ヨハネの黙示録」に対して、「小黙示録」と呼ばれている。

①b 黙示思想とは、紀元前2世紀後半から紀元後1世紀の終わりにかけて、ユダヤ教内に広がって

いた思想であり、それを著したさまざまな文書が今も残されている(ダニエル書など)。この思想によれば、今の世は悪霊に支配され、神の意思が行われていない「悪の世」であるが、これを神はいつまでも見過ごしはせず、この天と地に破局をもたらし、来たるべき世への転換(終末)を起し、悪人には永遠の罰をくだし、正しい人には永遠の祝福を与える、とされる。

③この黙示思想はキリスト教の成立にも影響を与えたが、ユダヤ教黙示思想とは異なり、キリストの死と復活によって新たな時代はすでに始まったといえるほどに接近しており、終末にはキリストの再臨があり、キリスト者は救いのために呼び集められる、と主張されている。

④マルコ 13 章は三つの部分に分けられる。終末に関する教えが終わると、受難物語へと突き進む。

⑤「終末の徴と苦難」(二三 5—23)

人を惑わすような出来事が起こり、方々に地震があり、飢饉が起こるが、まだ世の終わりではなく、産みの苦しみの始まりである。キリスト者への迫害も起こるが、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。憎むべき破壊者が立つてはならない所に立つのを見たら、山々に逃げなさい。これまで体験したことのない苦難が来るからである。偽メシアが現れ、人々を惑わそうとするが、信じてはならない。気をつけていなさい。

⑥「人の子が来る」(二三 24—27)

苦難の後に、天変地異が起こり、人の子が雲に乗って来る。人の子は天使を遣わし、選ばれた人々を四方から呼び集める。

⑦「終末に近い。目を覚ましていなさい」(二三 28—37)

いちじくの木の枝が柔らかくなり、葉が伸びると、夏が近づいたのが分かる。それと同じように、これらのことが起こるのを見たら、人の子が戸口に近づいていることを悟りなさい。その日、その時はだれも知らない。だから気をつけて、目を覚ましていなさい。

② 13 章 33—37 節の構成

⑧全体の構成

福音の骨組みを作り上げる表現は「目を覚ましていなさい」と、「なぜならあなたがたは知らない」と、「いつ」である。従って、「いつであるのかを、あなたがたは知らないのだから、目を覚ましていなさい」ということが骨子となっている。第一段落は第三段落と対応し、両者の間にとえを述べる第二段落が挟み込まれている。

⑨第一段落(33節)

文頭の「気をつけなさい」は動詞「見る(プレポー)」の現在命令形であり、動作の継続が求められている。眠らずに、見続けているなら、この日が救いの時であることが分かる。「その日」とは 27 節以前に述べられた「終わりの日」のことであり、それはキリスト者が救いのために呼び集められる日である(27節)。

⑩第二段落(34節)

家の主人のほかに、「僕たち」と「門番」が登場するが、彼らは 35 節では何の役割も演じていない。このことを根拠に、34 節のたとえはもともと独立していたたとえであり、破滅の接近を警告するために律法学者に向けて語られたたとえだと考える学者もいる。しかし、現在の文脈では、キリストの再臨を間近に控えたキリスト者への励ましと戒めを意図するたとえであるのは明らかである。

④ 第三段落 (35—37 節)

34 節の最後の動詞「目を覚ましていられる」が冒頭に置かれ、34 節のたとえがキリスト者の共同体に当てはめられてゆく。主人の帰宅時間を知らないのだから、「眠らないで」、救いの時を取り逃すことがないように、「目を覚ましていなさい」。この呼びかけは、一部の弟子だけでなく、「すべての」キリスト者に向けられている。

③ 救いの希望に立って「目覚めていなさい」(33 節)

① 「目覚めていなさい」とあるだけで、何を行うために目覚めているのか、その目的については一言も触れてはいない。触れていないのは、目覚めていることそのことに意味があるからである。つまり、ここでは、ある具体的な倫理行動を呼びかけるよりも前に、終末を控えたキリスト者の根本姿勢を「目を覚ましていられる」という表現で表している。

② 27 節で「そのとき、人の子は天使たちを遣わし、地の果てから天の果てまで、彼によって選ばれた人々を四方から呼び集める」と述べられていたように、キリストを信じる者にとっては、終末は救いの時にほかならない。その救いの希望に立って、「目覚めていなさい」と呼びかけられている。この呼びかけは警告ではなく、励ましである。救いがもうそこまで来ているから、私たちは「目を覚ましていられる」ことができる。

④ 終末を待ち望む姿勢 (34 節)

① 34 節は「目覚めていなさい」という呼びかけを説明する短いたとえである。だが、このたとえが解き明かそうとする趣旨はどこにあるのだろうか。現在の文脈の中で考えるなら、「旅に出る人」とは昇天したイエスであり、「僕たち」とか「門番」は弟子たちである。従って、このたとえの目的は、弟子たちに代表される、終末を待望する教会に対して、その終末を待ち望む態度を教える「目を覚ましていなさい」と述べることにある。

② この節で新共同訳が「責任」と訳した語はエクスイシア（権威）であり、それは 3 章 15 節（悪霊を追い出す権能）や 6 章 7 節（汚れた霊に対する権能）では弟子に授けられている。このことも、ここでの「僕たち」が弟子であることの一つの証拠になるだろう。

⑤ 戒めと励まし (35—37 節)

① 34 節のたとえの最後に置かれた「目を覚ましていなさい」という指示が、この節の冒頭で再び繰り返される。33 節にも原語は違うが、同じ意味の言葉「目覚めていなさい」が置かれている。また、目を覚ましていられる理由は「あなたがたは知らないからである」ということだが、これも 33 節と対応している。第三段落は第一段落に対応するが、第三段落では、35 節で主人の帰宅時間を表す言葉が列挙されていることから分かるように、帰宅が「いつなのか知らない」ということがいっそう強調されている。主人の帰宅時間、つまりキリスト再臨の「いつ」を人は知りえないと強調するのは、誤った宗教的熱狂（5b—6 節、21—23 節参照）を戒めると同時に、終末が遅れていると考えて油断し、熱意を失った人々を鼓舞するためである。

② 近づく終末に浮き足立ち、誤った宗教的熱狂に陥った人々たちに対しては、32 節「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである」とあるように、絶対的権威を持った神だけが「いつ」を決めることができると戒める。また、終末が遅れていると考え

て終末に無関心になった人たちに対しては、その時が分からないからこそ、目を覚ましているべきだと呼びかける。その時は、いつか分からない。しかし、主人は必ず帰ってくる。しかも、その日は救いの日にほかならないのである。

◎ 37 節の「目を覚ましていなさい」は 33 節の「目覚めていなさい」と対応して、困い込みを形作っており、福音のテーマをいっそう明確にしている。それはまた、5 節から始まったイエスの終末についての教えの結論でもある。「あなたがた」とは、3 節から考えるなら、ペトロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレのことであるが、「目を覚ましていなさい」という呼びかけは、この限られた弟子を越えて「すべての人に」まで広げられている。宗教的な熱狂に陥ることも、終末への関心を失うこともなく、希望のうちに今を生きるキリスト者の姿勢はまさに「目を覚ましてい」とである。

⑥ 救いの日に目を向けて生きる

① 「目を覚ましていいる (グレーゴレオー)」は、文字通りには「目を開けて眠り込まずにいる」状態を表すが、体ではなく心の状態を表し、どのような事態にも対処できる油断のなさを表して「覚めている」ことも表す。35 節と 37 節の「目を覚ましていいる」は、キリスト者の取るべき心構え、人々が取るべき心構えを表している。神の最終的な介入がいつ起こるのか誰も知らないのだから、油断せずに「目を覚ましていいる」ようにと「すべての人」にイエスは呼びかける。だが、終わりの日にキリストは再び来て、私たちを救いへと呼び出すのだから (27 節)、不安に脅えながら「目を覚ましていいる」のではない。救いへの希望に燃えて待っている。主が救うために来るとい希望がキリスト者を支え、「目を覚ましていいる」ことを可能にする。それがキリスト者の徴なのであり、その根本姿勢なのである。

② 「目を覚ましていいる」に対比される態度は、36 節の「眠っている (カセウドー)」である。この語も文字通りに「目を閉じて、眠る」ことを表すと共に、転じて、「死ぬ」ことを表したり、霊的に怠惰で無関心な状態を表して「眠っている」と言われることもある。36 節の「眠っている」は、目を覚ましていなさいという指示を忘れ、主人の帰宅を目覚めて迎えられなかった者を表している。帰宅する主人とはキリストのことであり、キリストが再び来るときに「眠っている」なら、その救いを寝過ぎすことになる。「目を覚ましていいる」という語によってキリスト者の取るべき根本姿勢が示されているのに対して、「眠っている」によってキリストの言葉を忘れ、キリストを迎えられずに救いを取り逃がす人が表されている。キリストの再臨が希望であることを忘れるなら、主人の指示はただの言い付けに終わる。言い付けとなれば、時が経つとともに守るのが億劫になり、やがて「眠ってしまう」のは当然である。キリスト者とは主人の言葉から希望をくみ取ることができる者のことである。希望があれば、眠ることなく、心を張りつめて、主人の帰宅に備えることができる。

◎ 34 節も含め、「目を覚ましていいる」は、委託された仕事を果たす忠実さよりも、主人を待つ姿勢と結びついている。それは、35 節では主人の帰宅だけに注意が向けられていることから明らかである。宗教的な熱狂も、委託された仕事への没頭も、再び来るイエス・キリストを忘れさせてしまふものとなるなら、無意味な狂騒に終わる。イエス・キリストを抜きにした終末待望などはありえない。キリスト者は終末の日は救いの日だと知っている。この希望が「目を覚まして」待たせる支えとなる。